

伝え合う力を高める国語科学習指導

—話す・聞く言語活動の充実を通して—

教職実践専攻・教育実践開発コース
学籍番号 19GP503 氏名 古川 弘基

1 はじめに

平成31年度(令和元年度)全国学力・学習状況調査の結果によれば、必要な情報を得るために概観して読むことや相手の意図を捉えながら聞き、自分の理解を確認する、質問をすることはできていた一方で、相手にわかりやすく伝えるための記述の工夫を考えたり、目的や意図に応じて自分の考えの理由を明確にしてまとめて書いたりすることに課題が示されている¹。つまり、情報を聞いたり読んだりして収集することができる一方、他者に向けて発する情報を整理して伝えるという力が課題とされていると考えられる。さらに、「目的や意図に応じて」という部分については、他者とやり取りをする中で相手と共有しなくてはならないという意識として考えられるが、その意識を児童がもてていないことが考えられる。したがって、こうした意識をもちながら他者とやり取りをする練習の場を授業において実践していく必要があると考えられる。この他者と目的や意図を共有しながら、互いの考えを伝え合う活動は、伝え合う力を育成することと関連が深い。つまり、伝え合う力を育むことが、これら諸課題を解決するために有効であると考えられる。

2 主題の意味

(1) 伝え合う力とは

「伝え合う力」は平成10年の小学校学習指導要領改訂以降、国語科の目標に掲げられている文言である。改訂当時の基本方針において「互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成すること」と記述されていた。また、「自分の考えをもち、論理的に意見を述べる能力、目的や場面などに応じて適切に表現する能力を重視する」としている²。

平成28年改訂の新学習指導要領においては、資質・能力の三つの柱に基づいた整理が行われ、「伝え合う力」は「理解していること・できることをどう使うか(未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成)」の中に位置付けられている。未来を切り拓いていくために必要とされる思考力・判断力・表現力等は、「物事の中から問題を見だし、その問題を定義し解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、振り返って次の問題発見・解決につなげていく過程」、「精査した情報を基に自分の考えを形成し、文章や発話によって表現したり、目的や場面、状況等に応じて互いの考えを適切に伝え合い、多様な考えを理解したり、集団としての考えを形成していく過程」、「思いや考えを基に構想し、意味や価値を創造していく過程」³の3つの過程に分類され、「伝え合う力」はこの2つ目の「考えを形成していく過程」に深く関わっている。このことから、目的や場面など変化する状況に合わせて互いの考えを伝え合う時に発揮されるものが「伝え合う力」であり、その育成が学習指導要領上で目指されていると考えられる。

「伝え合う力」の定義について、学習指導要領解説⁴では「人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重し、言語を通して正確に理解したり適切に表現したりする力」と説明されている。これをうけて、実践においてスピーチや討論、話し合いなど理解・表現が組み合わさった活動が盛んに行われてきた。しかし、「話し合いが出し合い」になっている等の問題点が指摘⁵され、双方向の伝え合いによる深まりが課題とされた。堀江は、「双方向的な『伝え合い』活動の本当の意義は、他者と伝え合うことにより、自分の学びをよりくっきりとしたものに高めることであることに留意したい」と述べている⁶。つまり伝え合う力の目的は、伝え合うことを通して、自分の学びを自覚することにあると考えられる。また、小森は、『『伝え合う力』を高めるためには、自分と相手との関係を具体的に設定したり、自分と相手とが置かれた『場面・状況・条件』等を限定したりする必要がある」と

したうえで「自分の立場から、『伝え合う力』を育成する要件や条件を明確にする必要がある。」と述べている⁷。これらのことから、伝え合う力を高めるためには、その活動内容や目的を具体的な視点で児童自身が捉えていく必要があると考えられる。小森は、伝え合う力を高める要件として、「五つの言語意識」⁸を提示している。小森によると、「五つの言語意識」とは、「①自分にとっての相手意識」、「②(①を受けて)自分にとっての目的意識」、「③(①, ②を受けて)自分にとっての場面や状況意識, 条件意識」、「④(①, ②, ③を受けて)自分が意図的, 計画的に活用するための表現力と理解力の方法意識」、「⑤(①, ②, ③, ④を受けて)自分の表現行為や理解行為を自己評価する評価意識」とされている。その上で、⑤の「評価意識」について、「学習者の側から、相手・目的, 場面や状況, 条件, 方法等の関係から、「評価意識」が積極的に深まるように工夫すること」が要であるとしている。つまり、「①誰に」「②何のために」「③どのような場で」「④どうやって伝えるか」を意識しながら学習活動を行い、最後のふり返りの場において「⑤自分の発表や話し合いがどうであったか」を自覚的に評価するという一連の力が児童に培われることこそ、伝え合う力を高めることであるとする。そこで、本研究における「五つの言語意識」をまとめ「伝え合う力」を以下のように定義する。

「伝え合う力」の定義

「誰に」「何のために」「どのような場で」「どうやって伝えるか」という言語意識に合わせてやりとりをし、「それがどうであったか」をうけて自覚する力。

(2) 言語活動の充実とは

国語科重要用語辞典で「話す、聞く、書く、読むという個人的及び社会的な場において展開される言葉に関する活動」と解説される「言語活動」は非常に広範な意味の用語であるが、平成20～21年告示の学習指導要領において、児童生徒の思考力、判断力、表現力等を育む観点から、その充実が求められた⁹。言語活動の充実について「国語科で培った能力を基本に、全ての教科等において充実する必要がある」¹⁰とされ、国語科がその基礎を成している。

中央教育審議会では、「言語活動の充実が児童生徒の学力の定着に寄与している」ことを成果としたうえで、「言語活動についての目的意識や、教科等の学習過程における位置づけが不明確であったり、指導計画等に効果的に位置づけられていないことがある」という課題から、今後の方向性について「見通しを立て、主体的に課題の発見・解決に取り組み、振り返るといった学習の過程において、言語活動を効果的に位置づけ、そのねらいを明確に示すことが必要」としている¹¹。これらのことを踏まえて、以下のことを言語活動の充実と捉える。

児童が目的意識をもち、見通しを立てて単元に位置づけられた言語活動に取り組むこと。

この言語活動の充実の捉えは、指導法の工夫点を考える上で大変有効であるとする。

3 研究の目標

「五つの言語意識」をもたせ、伝え合う力を発揮する話す・聞く言語活動を自己評価する学びを通して、伝え合う力を高める学習を究明する。

4 研究の仮説

「伝え方を意識できる言語活動を取り入れ、省察するようにすれば自分の話す・聞く態度に対して自覚的になるだろう。」

伝え合う力を発揮し、それを高めていくためには児童が自分の態度に自覚的になることが必要であると考えた。「五つの言語意識」は順序性があり、まず「誰に」や「何のために」といった相手意識や目的意識が共有され、見通しを立てて活動し、最後に自己評価する振り返りまでの一連の流れが、伝え合う力を高める過程として不可欠であるとする。また、自己評価に関しては、自分の状況をある程度客観的に省察する必要がある。このことから、上述のような仮説を考えた。

(1) 指導の工夫

- 〈工1〉明確なゴールを提示し，目的意識をもたせて発表する活動を取り入れる。
 - 〈工2〉聞き手の児童が，よいところについて評価項目にチェックし，話し手にフィードバックする活動を取り入れる。
 - 〈工3〉本単元毎時間の積み重ねが手元に残るワークシートを使用する。
 - 〈工4〉自己評価の基準を明示し，個人内比較を促す。
 - 〈工5〉内容を焦点化し，活動の手順がわかりやすい指示・板書をする。
- 〈工4〉〈工5〉については，本研究での実践を重ねることで見出されたものであるため，「6 実践授業案と考察」のみで扱っている。また，上述の工夫が有効であったかどうかを判断するために，検証の視点を以下に設定する。

(2) 検証の視点

- 〈検1〉「誰に(相手に)」「何のために」伝えるのかについて意識し，ワークシート等に書き起こしている姿。→ 〈工1〉
- 〈検2〉自分の準備や発表について，できたところ・できるようになったことを振り返り，次はこうしたいという意欲を記述等で示している姿。→ 〈工2〉〈工4〉
- 〈検3〉他者のよかったところについて感想などで伝えている姿。→ 〈工3〉〈工5〉

5 授業実践と考察

A市立B小学校で昨年度は3年生，今年度は4年生を対象に授業実践を行った。

(1) 昨年度の実践(A市立B小学校3年X組 26名)

①単元名「物語リーフレットですきなところをしょうかいしよう」

教材名「わすれられないおくりもの」(教育出版3上) ○本時(9/9時)

本単元では，主教材「わすれられないおくりもの」を使って，登場人物の人物像や気持ちなどをまとめながら，一人一冊のリーフレットを作成した(図1)。リーフレットの中心に，「物語のすきなところ」という欄を設け，単元最後の時間に物語交流会という形で紹介し合う活動を行った。ここでは，〈工1〉〈工3〉を取り入れ，実践している。

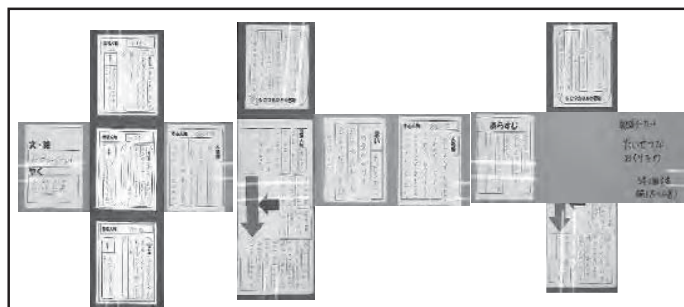


図1 物語リーフレット

[考察]単元の振り返りでは，「字がそまつだと気にするようになった」という，伝える相手を意識していることがわかるものや，「話し合いで大きな声で発表できた」という，〈検1〉にかかわる伝え合うための相手・目的を意識していることがわかる記述が見られた。これは，教材文を深く読み込んだ後に，自分の好きな段落を選ばせて，理由を書いてから発表会をするという〈工1〉の工夫が伝える目的や伝える相手をイメージしやすくしたためと考えられる。一方で，紹介し合った内容そのものや物語についての感想が多く見られたため，振り返りの内容を「教材の内容について」と「話し合った活動について」とで区別する必要があったと考えられる。また，付箋を使った話し合い活動はあまり児童に馴染みのないものであったため，話し合うことと書くことどちらかに大部分の時間を費やしてしまった児童がいたため，本時の見通しをもたせられていなかったと考えられる。「伝え合う」という本時の活動目的に合わせて，内容を焦点化していくべきであった。〈検3〉については，感想でよいところを伝え合うように指示がうまく出せなかったため，発表して終わりのような形になっているグループも見受けられた。これらから，次回の実践以降では，内容を焦点化することを意識し，ポ

イントとなる活動に児童が集中できるように工夫することが考えられる。

②単元名「ことわざ・慣用句 BOOK」で伝え合おう」

教材名「ことわざ・慣用句」(教育出版3下) ○本時(4/4時)

本単元では、主教材「ことわざ・慣用句」について、辞書を使って教科書にあることわざと慣用句の意味調べをしていくための「ことわざ・慣用句 BOOK」を作成した(図2)。第3時では、辞典や図書室の本の中から、自分が一つ伝えたいと思ったことわざ・慣用句を選び、例文を考えた。本時では、グループになり、自分の選んだことわざ・慣用句の意味と例文を伝え合った。その中で、来年度同じ内容を勉強する今の2年生に向けて、「わかりやすさ」「おもしろさ」「使いやすさ」の3観点から伝えたい例文の一つ選ぶという活動を行った。ここでは、〈工1〉〈工3〉を取り入れ、実践している。

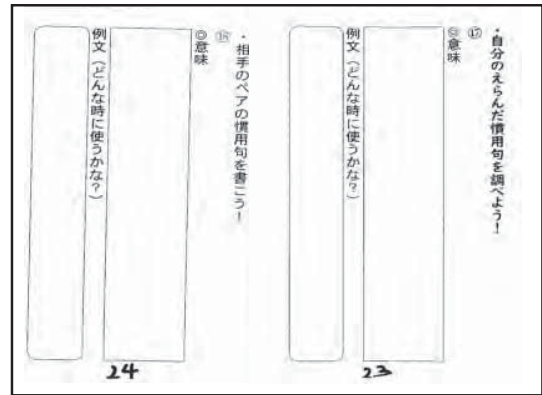


図2 「ことわざ・慣用句 BOOK」

[考察]本時では、グループにボイスレコーダーを置き、話合いの内容についてどんなやり取りが行われているかを文字起こしで追うこととした。児童aの発言について抽出したものが以下のものである(図3)。児童aの

児童a: ちょっと, cくんストップ。
ちがう, cくん。ここを読むってこと。
(読むのに時間がかかる児童bに向かって)
代わりに読もうか。
dさんのがいいと思う人手を挙げて。
ねえ, もう一回聞かよ。
じゃあ「(dが作った例文)」ね, 決定。

図3 話合い時の児童cの発言

発言は、活動に目的意識をもっているために、話合いを調整しようとするものが多くあった。グループの中で発表順を間違えて発表したcに注意をしたり、読むことに時間のかかるbに代読を提案したりするなどしていることがわかった。〈検1〉にかかわる「誰に」「何のために」といった部分の意識が見られる発言である。これは、〈工1〉として、2年生に伝えるために話し合うというゴール提示の工夫により、相手意識や目的意識をもつことができたためと考えられる。一方で、音声からは、話合いでトラブルになるグループや、一部の児童のみが話しているにとどまるグループがあることがわかった。そのため、〈検3〉について、達成されていないグループが多くあった。このことから、あらかじめ指示を出す段階で、児童が目的意識や相手意識をもち、感想等を伝え合えるように指示を出したり、板書に手順を示したりする工夫が必要である。今後の実践で留意しながら取り組む課題とした。

(2)今年度の実践(A市立B小学校4年X組 24名)

①単元名「想像が広がる写真集を作るために、写真を上手にいて案しよう」

教材名「写真をもとに話そう」(教育出版4上) ○本時(5/6時)

本単元では、言語活動の位置づけとして、写真集を作るための写真を提案する発表を行うことを第1時に課題提示し、目的意識をもたせた〈工1〉。また、第3時と第5時の発表の場では、ワークシートに発表者の良いところに丸をつける表を用意し、発表後の感想交流の時間によいところを聞き手からフィードバックするように指示を出した〈工2〉。

ワークシートについては、全時間分が冊子になったものを渡し、毎時間の積み重ねを振り返りやすいように工夫した〈工3〉(図4)。単元の指導計画は以下の通りである。

次	時	主な学習活動	指導のねらい	評価規準
一	1	<ul style="list-style-type: none"> 単元の学習課題の確認をする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 写真を手がかりに想像したことをわかりやすく伝えよう。 </div> <ul style="list-style-type: none"> 写真について発表例を聞く。 教科書にある写真を見比べ、写っているものやその撮り方について、気付いたことを話し合う。 気付いたことから想像を広げ、板書のツリー図にまとめる。 話す写真を教科書から決める。 	<ul style="list-style-type: none"> 「想像が広がる写真集を作るために、写真集を上手に提案しよう」という言語活動を提示し、見通しをもたせる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 写真を手がかりに想像したことをわかりやすく伝えよう。 </div> <ul style="list-style-type: none"> メモや発表をする様子を、教科書を見て捉えさせる。 写真の撮り手の視点に立って、撮り方の特徴があることをつかませる。 	[主]学習の見通しをもち、写真から想像することと、その根拠を分けることを理解しながら、発表に使う写真を選んでいる。
二	2	<ul style="list-style-type: none"> 選んだ写真から気付いたこと、想像したことをツリー図にする。 話の中心を決め構成を考える。 発表するための原稿を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> 既習事項でメモの取り方を確認する。(特に「短く書く」という点) ツリー図の使い方をおさえる。 想像したことから、話の中心を決めるよう指示し、構想させる。 	[知・技(2)ア]写真に写るもの、想像したことを区別し、話全体と中心の関係を理解して構成を考えて原稿に書いている。
	3	<ul style="list-style-type: none"> 発表のための原稿をまとめる。 写真提案会(練習)を行う。 グループで聞き合う。 感想や意見を伝え合う。 	<ul style="list-style-type: none"> 発表のために前時に準備した原稿の続きをさせる。 グループで交流させ、抑揚や強弱、間の取り方についてアドバイスさせる。 うまくできたところやできなかったところを振り返らせる。 	[知・技(1)イ]言葉の抑揚や強弱、間の取り方に注意しながら相手を見て話している。
三	4	<ul style="list-style-type: none"> 写真を決める(児童各自撮影)。 選んだ写真からツリー図を書く。 話の中心を決め、原稿を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> 想像を伝えたいと思える写真をそれぞれ選ばせる。 ツリー図を広げ、様々な想像を引き出させる。 想像したことの中から話の中心を決めるよう指示し構想させる。 	[話す・聞くイ]想像と根拠となる事実について、ツリー図を手がかりにして、話の中心が明確になるように構成を考えている。
	5 (本時)	<ul style="list-style-type: none"> 原稿やツリー図を見て、今回発表する時の目標を考える。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 写真てい案会をしよう。 </div> <ul style="list-style-type: none"> 発表に向けて読む練習をする。 写真提案会を行う。 感想や意見を交流する。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートを見返しどんな発表をすればよいか、抑揚や強弱、間の取り方を考えさせる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 写真てい案会をしよう。 </div> <ul style="list-style-type: none"> 発表についてよいところをワークシートのチェック項目にしたがって記入するよう指示する。 	[話す・聞くウ]話の中心や話す場面を意識して、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などを工夫して発表している。
	6	<ul style="list-style-type: none"> 発表の振り返りを行う。 感想を伝え合う。 単元の振り返りをする。 	<ul style="list-style-type: none"> 前時のグループの他者評価で自分の良かったところを確認するように指示する。 発表の自己評価を書かせる。 自分の発表や準備の活動について良い点と改善点を見出させる。 	[知・技(2)ア]写真に写るもの、想像したことが区別され、話全体と中心の関係が明確であったか等の、発表内容を振り返っている。

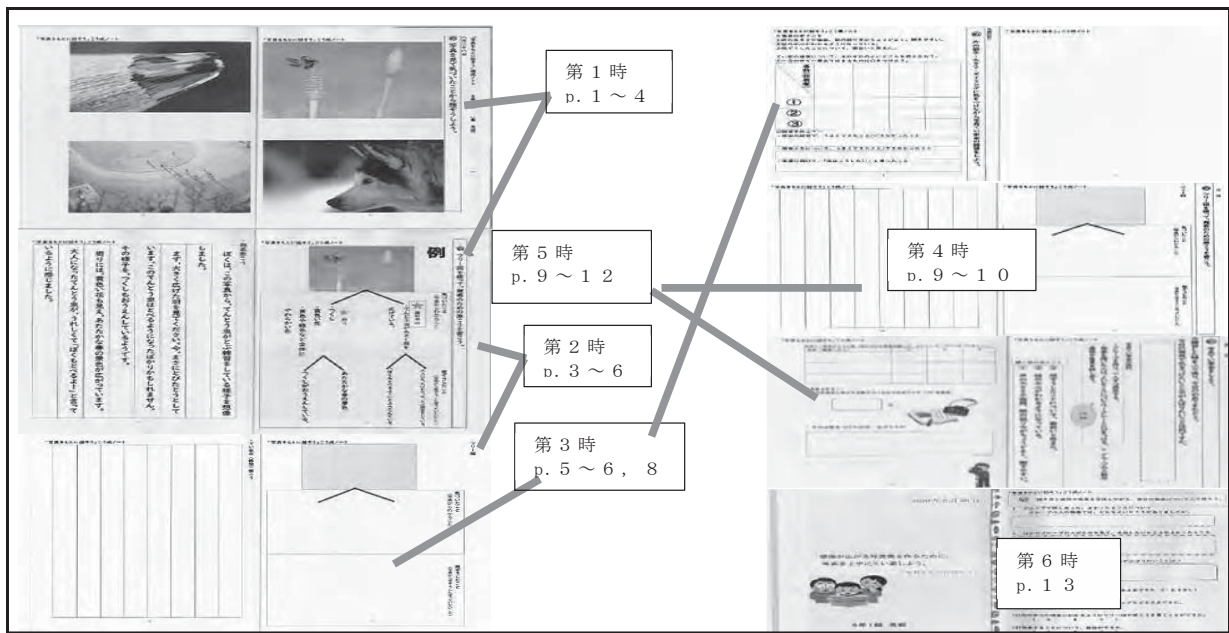


図4 今年度の実践で使用したワークシート

[考察] 振り返りの記述からそれぞれの検証の視点について考察する。

〈検1〉について「聞こえやすい声で」「自分が伝えたいところを読むとき、少し声を大きくしたり、高くしたりする」といった、相手・目的意識をもって活動したことがわかる記述が多く見られた。これは、〈工1〉として、写真集を作るというゴールを第1時に提示したことが、児童の相手意識や目的意識につながったと考えられる。

〈検2〉について、「大きな声で強弱をつけて話せた」や「声の大きさはもっとがんばりたい」など、〈工2〉の他者評価として、よいところを他者から伝えられたことで、自分の伝え合う力について、長所や課題を捉えながら自覚的になっていることがわかる記述がほぼ全員に見られた(図5)。

〈検3〉について、4名の児童が同じグループの人から伝えられた感想について記述していることがわかった。グループでの交流自体の具体的な発言については追えていないが、よいところを感想等で伝えてもらったことが記述に表れていると考えられる。全体的によさを感想等で伝え合うことができたとは言えないが、〈工3〉として、グループ内で発表を積み重ねたワークシートがあったことにより、児童個人の進歩等も含めて感想で伝え合っている姿が確認できたと考えられる。

単元の振り返りで行った自己評価では、ABCの3段階で、「発表することに自信がついた」という項目でAをつけた児童が11名と半分以下にとどまり、Bが9名、Cが3名という結果になった。Cをつけた児童については、写真がうまくとれても、発表のための原稿がうまく書けなかった児童や、しっかり書き上げた原稿を本番でうまく発表できなかった児童、本番になってわかりづらいとかんじた箇所を書き直していた児童が低く自己評価していた。自覚的になることで、否定的に捉える場合を考えていなかったため、そうした児童に対してコメントなどで自分から見たよさを伝え、自己評価の機会を積み重ねながら、自分の中の成長を評価する姿勢を培うようにしたいと考えている。自己評価する中で伝え合う力に自覚的になっていく段階で、個人内比較を促し、進歩する自分に自信をもって、やり取りする実践を考えることとする。

発表についてこれからがんばりたいこと(単元最後の振り返り)
声を大きくしたいです!!
声の調子に気をつける。
①, ②, ③をぜんぶパーフェクトにする。
もっとはやくちじゃなくゆっくりしゃべること
もう少し、大きな声で話して、「、」や「。」がついていたら、ちゃんと間を取って、聞きやすく話せたらいいと思いました。
話の中心をもうちょっとうまくしたいです。
声の大きさもちょうどよくぎりをつけて
もっとじしんをもってはっぴょうする。できなかつたところをあきらめないでおす。ほかの人のよいところをまねする。
声の強弱、間のとり方などをがんばりたいです。
聞こえやすい声で見えない物とかでもそうぞうして中心はずれないようにつぎあるときはその3つをまもってきちんとはっぴょうできたらいいと思います。
もっとも〜と声を大きくしたい!!
はなしの中心をがんばる
声大きくする。
中心がずれないようにがんばります。
のどのちょうし
きんちょうしても自信をもって発表する。
自分が伝えたいところを読むとき、少し声を大きくしたり、高くしたりする。
声の大きさ、タイミング、調子をこれからがんばりたい。
みんなききやすくしたいです。
もっと大きな声で話す。
話の中心からズレずに、声の大きさをちゃんとしたいです。
声がきこえやすくしこと。
もっと声を大きくして発表すれば、もっと発表をきん張せずに、できるのかなあとと思いました。

図5 児童の振り返り(第6時)

6 実践授業案と考察

昨年度から今年度前期までの実践を通して、「自己評価の基準を明示し、個人内比較を促す」ことと「内容を焦点化し、活動の手順がわかりやすい指示・板書をする」ことを今後の実践の工夫として行う必要があると考えた。そこで、これら2つをそれぞれ〈工4〉〈工5〉として、次の実践において取り入れることとした。〈工4〉は〈検2〉を達成するために、〈工5〉は〈検3〉につなげるために位置づけ、次の実践授業を考案した。なお、実習協力校での実践が新型コロナウイルス感染拡大防止の一環として不可能となってしまったため、教職大学院院生の協力を受けて模擬授業を行い、その模擬授業を省察した。

単元名『日本の文化』について資料にまとめ、『4年1組日本の〇〇発表会』をしよう。」

教材名「調べてわかったことを発表しよう」(教育出版4下) ○模擬授業 1/8時

本単元では、〈工1〉の見通しをもたせるゴールして、調べ学習をまとめた発表例を提示する(図6)。また、第7時の発表では、発表を聞く観点を提示し、よかったところを付箋に書くことでフィードバックすることを想定している〈工2〉。さらに、本実践のワークシートも、毎時間の積み重ねを振り返りやすくするため、冊子のワークシートを第1時からの配布を考えている〈工3〉。前回の実践は個人で撮った写真をグループの中で発表する活動であったが、今回は、グループで役割を分担して調べ学習を行う単元展開となっている(図7)。

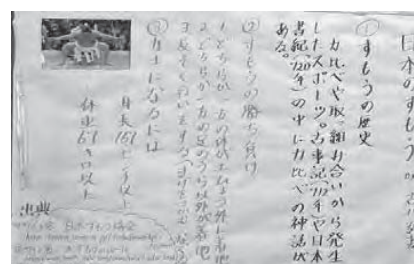


図6 提示した発表

模擬授業(第1時)は「日本の文化」というテーマで、どのようなものが日本の文化としてあるのか、マインドマップを黒板に提示し、スポーツや食、アニメなど複数のカテゴリーが提示された状態で、今後の調べ学習するテーマを決めるというものである。

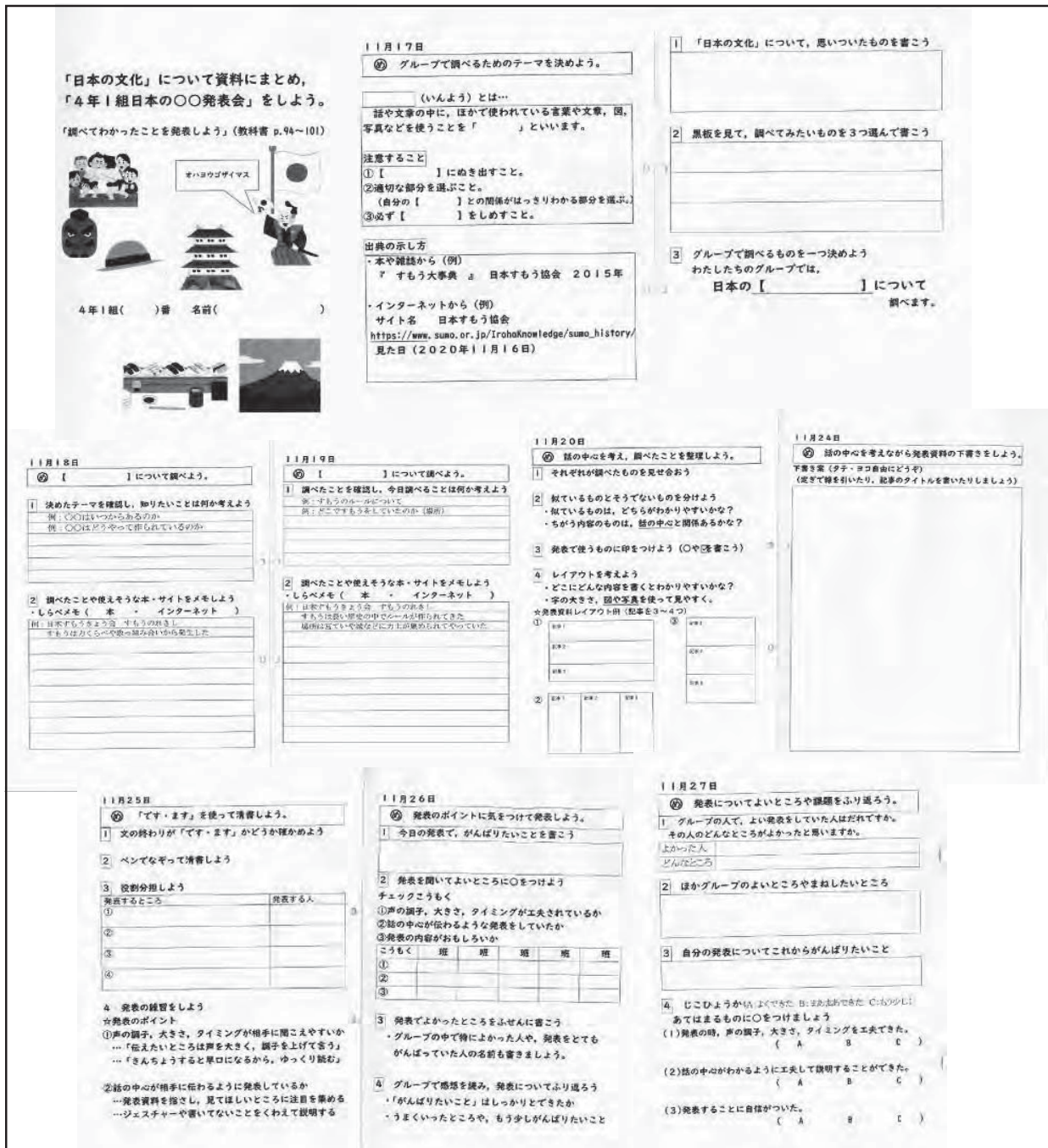


図6 実践授業案: 冊子にしたワークシート

今回の授業構想では、<工4><工5>を新たに追加している。単元の指導計画に当てはめると以下のようなになる。

次	時	主な学習活動	指導の工夫	検証の視点
一	1 (本時)	<ul style="list-style-type: none"> 単元の学習課題を把握する。 発表例を聞く。 引用の仕方を知る。 テーマを考える。 グループで一つ、テーマを決める。 	<ul style="list-style-type: none"> ① 明確なゴールを提示し、目的意識をもたせて発表する活動を取り入れる。 ③ 本単元毎時間の積み重ねが手元に残るワークシートを使用する。 	

二	2	<ul style="list-style-type: none"> ・選んだテーマを確認する。 ・調べる内容と方法を考える。 ・調べ学習を行う。 ・見たページや図書を記録する。 	<ul style="list-style-type: none"> ③ 本単元毎時間の積み重ねが手元に残るワークシートを使用する。 	<ul style="list-style-type: none"> ① 「だれに、何のために伝えるのか」を意識して、ワークシート等に書き起こす姿。
	3	<ul style="list-style-type: none"> ・グループで調べた内容を見せ合う。 ・調べる内容を再確認する。 ・調べ学習を行う。 ・見たページや図書を記録する。 	<ul style="list-style-type: none"> ③ 本単元毎時間の積み重ねが手元に残るワークシートを使用する。 	<ul style="list-style-type: none"> ① 「だれに、何のために伝えるのか」を意識して、ワークシート等に書き起こす姿。
	4	<ul style="list-style-type: none"> ・グループで調べた内容を見せ合う。 ・資料の比較・分類をする。 ・構成・レイアウトを考える。 ・下書きをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ③ 本単元毎時間の積み重ねが手元に残るワークシートを使用する。 ④ 自己評価の基準を明示し、個人内比較を促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ① 「だれに、何のために伝えるのか」を意識して、ワークシート等に書き起こす姿。
	5	<ul style="list-style-type: none"> ・資料の比較・分類をする。 ・構成・レイアウトを考える。 ・下書きをする。 ・清書する。 	<ul style="list-style-type: none"> ③ 本単元毎時間の積み重ねが手元に残るワークシートを使用する。 	<ul style="list-style-type: none"> ① 「だれに、何のために伝えるのか」を意識して、ワークシート等に書き起こす姿。
	6	<ul style="list-style-type: none"> ・清書する。 ・発表の役割分担を決める。 ・発表の練習を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ③ 本単元毎時間の積み重ねが手元に残るワークシートを使用する。 ④ 自己評価の基準を明示し、個人内比較を促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ① 「だれに、何のために伝えるのか」を意識して、ワークシート等に書き起こす姿。
	三	7	<ul style="list-style-type: none"> ・発表の目標を立てる。 ・発表の練習を行う。 ・グループごとに発表する。 ・感想とよかったところを伝え合う。 ・本時の振り返りをワークシートに記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ② 聞き手の児童が、よいところについて評価項目にチェックし、話し手にフィードバックをする活動を取り入れる。 ③ 本単元毎時間の積み重ねが手元に残るワークシートを使用する。 ④ 自己評価の基準を明示し、個人内比較を促す。
8		<ul style="list-style-type: none"> ・発表したものを廊下に掲示する。 ・他グループに感想を伝え合う。 ・自分のよかったところ・うまくできたことについて振り返る。 ・単元を振り返り、自己評価をワークシートに記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ③ 本単元毎時間の積み重ねが手元に残るワークシートを使用する。 ④ 自己評価の基準を明示し、個人内比較を促す。 ⑤ 内容を焦点化し、活動の手順が分かりやすい指示・板書を取り入れる 	<ul style="list-style-type: none"> ② 自分の準備や発表について、できたところ・できるようになったことを記述し、次はこうしたいという意欲を示す姿。 ③ 他者によかったところについて感想などで伝えている姿。

[考察] 児童役の院生 A～G に模擬授業を行い、省察したことをまとめる。参加した院生から得られた意見・感想を、成果と課題に整理した (図 7)。

	成果	課題
A	・例示したものがイメージしやすかった。	・テーマを選ばせる際の手立てが必要。
B	・自分の考えをもつことを意識できる。	—
C	・ワークシートや指示が見通しをもちやすい。	—
D	・発表例と学習の流れが示され見通しがもてた。	・ワークシートのフォントが画一的で字が大きすぎる。
E	・見通しがわかりやすい(板書・ワークシート)。	・「話す・聞く」活動メインだが、書く量が多くないか。
F	—	・学習の流れがワークシートにもあるとよい。

図 7 院生から得られた成果と課題

模擬授業によって、〈工1〉と〈工3〉についての成果と課題が得られた。

まず、〈工1〉の「目的意識をもたせるための明確なゴール提示」について、学習のイメージや見通しをもたせることにつながられていたと考えられる。一方で、本時の調べ学習の展開に先立って、どのようなテーマを児童が選出するのかについて改善の余地があった。これは、学習の見通しをもったうえで、どんなテーマで調べるかというところへの意識を児童にもたせることに関わるものと考えられる。また、学習の手順を板書に示すだけでなく、児童が使うワークシートにも提示していれば、もっと見通しをもちやすくなるのではないかという意見が模擬授業を受けた院生から出された。〈検1〉につなげるためには、相手意識や目的意識の先にある、方法意識を捉える手立てとして、調べ学習を充実させるためのテーマ設定を深く考えられるようなものにしなければならないと考える。

さらに、「日本の文化」について調べるといいう單元設計も、よく吟味する必要がある。この内容で進めるとするのであれば、各グループのテーマが重複しないようにする手立てや、言葉がけをゴール提示に並行して取り入れたい。

〈工3〉については、毎時間の活動内容が見やすくなっていて、見通しをもつことにつながったという意見が出された。一方で、ワークシートのフォントが画一的で、大事な部分や押さえたい部分がどこなのかわかりづらいという意見や、話すこと・聞くことの活動が中心となっているのにもかかわらず、調べたことや発表のレイアウトについて書くことの分量があまりにも多すぎるといった意見が出た。この、フォントについては、発表の観点や引用・出典の書き方の欄を目立たせる等の改善が必要である。毎時間の活動を積み重ねていくことに伴って、毎時間のポイントも児童にとって把握しやすくするように作っていくべきであると考えられる。ワークシートに書く量については、児童の実態から、前もってしっかりと準備した内容を児童が自信をもって発表させたいと考えていたため、意図的に文字数を多めに設定していたが、書くことに抵抗のある児童等に対しては、減らすことも有効であると考えられる。

この実践授業案は、教育現場で実践するにあたって今後の課題として、意欲的に取り組んでいくこととする。

謝辞

本研究にご協力を賜りました実習校の先生方、児童のみなさんに厚く御礼申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 国立教育政策研究所(2019)「平成31年度(令和元年度)全国学力・学習状況調査の結果(概要)」
- 2) 教育課程審議会(1998)「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について(答申)」4 各教科・科目等の内容 (2)(i)国語
(https://www.nise.go.jp/blog/2000/05/b2_h100729_01.html#TOSHIN) 閲覧日:2020年12月25日
- 3) 中央教育審議会(2016)「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について(答申)」p.30
(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf) 閲覧日:2020年12月25日
- 4) 文部科学省(2017)「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説国語編」p.12
- 5) 村松賢一(2008)「話し合いの問題点」
(「教育科学 国語教育 No.698[双方向的な「伝え合う」活動を創る]」p.20 明治図書)
- 6) 堀江祐爾「自分の学びをよりくつきりとしたものに高めるために」
(「教育科学 国語教育 No.698[双方向的な「伝え合う」活動を創る]」p.6 明治図書)
- 7) 小森茂(1999)『なぜ国語科は「総合的学習」と連携を図るのか』明治図書p.77, 78, 86
- 8) 同書 p.77
- 9) 高木まさき他(2015)「国語科重要用語辞典」p.57, 234 明治図書
- 10) 文部科学省(2011)「言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】」p.11 教育出版
- 11) 中央教育審議会(2016)「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について(補足資料)②言語活動の充実について」